

ティアニー先生の臨床入門

ローレンス・ティアニー，松村正巳 著

大好評だった前著『ティアニー先生の診断入門』に続いて本書が世に出た。「名匠に学ぶに勝るものなし!!」のキャッチフレーズに思わず読書欲がかき立てられる。

第1部「臨床入門」では豊富な臨床経験をもとにティアニー先生が、医学の神髄をわかりやすく解説される。「より多くの時間を患者とともに過ごした医学生・研修医こそが優れた臨床医として成長していく」「同僚が主治医である患者をも観察できる機会にできるだけ参加し、病棟・外来・救命救急室で最大限時間を過ごすべき」……、これらの姿勢は臨床能力を極めようとする者の不易の姿である。職人の年季奉公と同じく、良き指導医から導きを受け、額に汗し食欲に患者さんから直接学ぶことの重要性が強調されている。さらに、指導医の心得に対しては、「最良の教育者のゴールは、生徒が教育者よりも、より良き医師に成長すること。教育者は常に、生徒の知識欲、より経験しようとする意欲を刺激しなければならない」と述べられている。心深くに楔を打ち込まれた、そんな強い印象を受けた。

研修医は第2部「症例呈示のスキル」を読み実践すれば、指導医から必ずや賞賛の嵐を受けることだろう。第3部では12の症例を用いながら診断を導くためのポイントが解説されている。キーワードの適切な抽出と重要キーワードからの鑑別診断の展開が見事である。ここでは時に厳しく親愛の情を胸に、きらめくパールとともに医学の深淵が描かれている。医学教育におけるパールは「ある疾患の1つの側面を短く、明快に表現し、さらにユーモアをも加味されたもの」である。「50歳以上の患者で多発性硬化症を診断したら、真の診断はほかにある (If you diagnose multiple sclerosis over age 50, diagnose something else.)」臨床経験が増すほど、パールが語りかける真理がわかってくる。

ティアニー先生、松村先生の共著によるこの書を読み終えて、私は利休の言葉「茶はさびて心はあつくもてなせよ」を思い出した。すべての過飾をそぎ落とし、シンプルな中に真理を見つけようとした日本の「わび」「さび」の精神と診断学は通じるものがある。診断では目くらましとなる雑多の情報の中から重要なキーワードだけを抽出しなければならない。パールには「美意識」が見事に集約され、厳しさと深さ、さらにはユーモアが同居し、われわれに医学の崇高さと学ぶ楽しさを語りかける。

私がカリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) で初めてティアニー先生にお会いし教を乞うたのは10年前である。「各科の専門医と堂々わりあうほど医学知識が豊富で、病歴と基本的身体所見だけからこれほど正確に診断を導く医師がアメリカにはいるのか!」と初対面から圧倒された。この本を読み、優れた内科医の芸術的思考プロセスを多くの医学生や研修医の皆さんに肌で感じて欲しい。高価な画像に頼るのではなく、患者さんとの「一期一会」を大切に、診断への熱い情熱と研ぎ澄ました精神を持てば、シンプルな情報にも診断を導くヒントがたくさん隠されている。この本はこのようなことをわれわれに語りかける名著である。これは決して天才のひらめきではなく、たくさんの患者さんと真摯に向かい合った医師だけが体得できる境地なのである。

藤田保健衛生大学教授・総合救急内科
山中克郎

A5 頁164 2010年

定価 3,150円 (本体 3,000円 + 税5%)

[ISBN978-4-260-01177-8] 医学書院刊